続　古いヨーロッパ図書館学文献

折田　洋晴（立教大学兼任講師）

前号で、ネットで読める古いヨーロッパ図書館学文献のいくつかを紹介した。今回はその続きである。

1. C. クレマン『博物館、あるいは図書館』（1635）

Claude Clément（1594-1643）という名前を最初に見たのはクセジュ文庫のアンドレ・マソン、ポール・サルヴァン著『図書館』（1969）の中であり、「彼［クレマン］は図書館の装飾用に、一連の紋章と寓意的な形象をつくりあげたが、これがその後二世紀のあいだにわたって、オーストリアからポルトガルまでの、ほとんど全ヨーロッパの図書館の《装飾文法》となった」[1]と記されている。この時は読み流しただけであったが、同じマソンの著書 *The pictorial catalogue*[2]（1981）を読んだときは、C. クレマンについてもう少し調べなければと思い、さらに彼の別の著書 *Le décor des bibliothèques*[3]（1972）も入手してみた。それらの中でしばしば言及されているのがクレマンの *Musei, sive Bibliothecae*[4]（1635）という本である。一体これはどんな本なのか気になり、是非この本を見てみたいといろいろ探したが、ファクシミリ版の刊行もなく、様々な古書店目録でも見つけることはできなかった。それが､数年前からネットで閲覧が出来るようになっている。７年くらい前であろうか、Google Books でこの本が部分的に公開されていることを発見し、ダウンロードした。しかし、部分なのでそのままにしていたが、この数年の間に何コピーもの本が全文デジタル化されており[5]、それでは少し読んでみようということになったわけである。以下では同書についてざっと紹介してみよう[6]。

タイトルを直訳すると「個人または公共の博物館、図書館における建築、配列、管理、利用についての４書；エスコリアル宮殿内王立聖ラウレンティウス図書館の正確な叙述を付す」となろうか。博物館は musei を訳したものだが、これは「芸術の女神ムーサの神殿」を意味するギリシア語μουσειονのラテン語で、ルネサンス期には学芸の研究機関といった意味で使われおり、図書館はムセイオンの一施設であった。本書は四折（4º）の判型、本文だけでも 552 頁ある大著で、前後に献辞、序文、索引、寓意一覧表、銘文例などがある。第 1 書（Liber primus: pp.1-284）は建築（extructio）をテーマとしているが、最初に図書館の目的として以下の 8 点が述べられている[7]。①公共への有用性、②学問の公開、③学問の比較対照、④快い楽しみ、⑤愚者の教化、⑥卓越の誇示、⑦誤った学問の明示、⑧高貴な才能の聖化。各論点の説明は略すが、これらはクレマンの所属するイエズス会の考え方が強く表われていると考えられ、イエズス会の図書館論については後述することとする。

目的の次は本書の特徴である図書館建築についての記述となる。古代からどのような図書館が造られてきたかを概括した後、古代エジプトの碑文「魂の救済所（medica animi officina）」など図書館に関係する 14 の銘文（sententia inscribendum）が注釈・解説され、次いでヘルメス・ミネルヴァ・アモール・ヘラクレスという図書館を司る４人の神像について語られている。そして、「キリストの磔刑」など 12 のテーマについてそれらの絵画化と寓意が述べられた後、32 種の寓意図像の例が示され、さらに文献研究の寓意の例が 6 種述べられている。最後は 45 頁にわたって図書館の柱や壁孔などの装飾について記述され、マドリッドのイエズス会学院図書館を例にして、各学問分野での代表的な 180 人ほどの著作者を列挙している。

第 2 書（Liber secundus: pp.285-447）は instructio をテーマとしているが、これを「配列」と訳したのは、図書館での本をカテゴリーに分類して配列することについて記されているからである。しかし、クレマンが語るのは、本をどう分類するかということだけではなく、利用者がその分類体系を理解できるようにするにはどうするかということなのだ。分類体系は上記のイエズス会学院図書館のものが使われ、以下の 24 のカテゴリーに分かれる。I. 聖書 II. ラテン教父 III. ギリシア教父 IV. 聖典釈義 V. 信仰論争審理 VI. 民衆演説 VII. スコラ神学 VIII. 道徳神学 IX. 教会法 X. 民法 XI. 観想哲学 XII. 道徳哲学 XIII. 数学 XIV. 自然哲学 XV. 医学 XVI. 宗教史 XVII. 世俗史 XVIII. 文献学 XIX. 修辞学 XX. 詩学 XXI. 文法 XXII. 敬虔・禁欲 XXIII. 写本 XXIV. ヘブライ語・カルデア語・シリア語・アラビア語・エチオピア語文献。クレマンはこれらのカテゴリーに対し、どのような像やイメージ（icones）を配置するかを詳しく述べている。次に、図書館には数学器具、古代貨幣、古物、標本、地球儀なども重要であると述べる一方、どのような本が禁書であるか、それらの隔離・廃棄などについても語っている。

第 3 書（Liber tertius: pp.448-476）は管理（cura）をテーマとしており、図書館技術は精密な規則が必要であるとし、古代からのすぐれた図書館人の話、次いで教会図書館の司書の話など図書館史的記述が続き、司書が管理にあたる使用人の業務についても触れている。次に、すぐれた図書館管理法として、利用者を限定すること、本を清潔で美しく保つこと、古い本の保存法、本の選び方の注意点などが書かれている。

第 4 書（Liber quartus: pp.477-514）は利用（usus）をテーマとしているが、司書の立場からではなく、利用者の立場からの図書館利用法が語られている。まず、loci communes[8] から探せるようにするノートの説明を行ない、30 ほどの件名を掲げ、それぞれに関係した 200 ほどの別の件名を示している[9]。この loci communes を見出しとして以下に必要事項を記したノートは後に commonplace book と呼ばれるようになり、哲学者 J. ロックは、その作成法を書き残している[10] さらに、クレマンが学生に実際に教えている勉強法、研究法などがいろいろ書かれている。

以上の 4 書の後（pp.515-536）にエスコリアル宮殿内王立聖ラウレンティウス図書館（以下エスコリアル図書館と略記）についての記述がある。この図書館はフィリップ 2 世（1527-1598）がマドリッド郊外に建設したエスコリアル宮殿の中に設置された修道院図書館で、宮殿[11]は 1984 年にユネスコ世界遺産に登録された。昔から、宮殿の壮麗さを見ようと多くの旅行者が訪れており、例えば 1749 年に出版された Udal ap Rhys 著 *An account of the most remarkable places and curiosities in Spain and Portugal* というスペイン・ポルトガル案内記では 30 頁にわたってエスコリアル宮殿の解説が載っている[12]。ところで、エスコリアル宮殿を最初に訪れた日本人は天正遣欧使節団の 6 人で、彼らの訪問の様子はデ・サンデ著『天正遣欧使節記』[13]に記されている。エスコリアル図書館はクレマンの本書刊行より約 50 年前に開館しており、クレマンは既に書かれた文献を利用した。例えば、神学者 Juan Baulista Cardona（1511-1598）の書いたエスコリアル図書館論[14]や聖ラウレンティウス修道院長で図書館長でもあった José de Sigüenza（1544-1606）の書いた『聖ヒエロニムス会史（*Historia de la Orden de San Geronimo*）』第 3 部[15]の、特に第 4 書 9-11 章が利用されている[16]。また、法王シクストゥス 5 世により新しく建てられた壮麗なヴァティカン図書館について書かれたムツィオ・パンサ（1565-1628）の『ヴァティカン図書館について（*Della libraria Vaticana*）』[17]（1590）やアンジェロ・ロッカ（1545-1620）の『ヴァティカン使徒図書館（*Bibliotheca Apostolica Vaticana*）』[18]（1591）の記述スタイルがまねられており、両書とも建築装飾について多く語られていることも共通している。

クレマンは 7 章に分けてこの図書館について書いているが、まずは設立の経緯が語られ、第 1 章では部屋の配置、大きさ、窓、机、書棚[19]の様子など、第 2 章では天井画や破風の絵が紹介されている[20]。このフレスコ画を描いたのはイタリアの画家 Pellegrino Tibaldi[21]（527-1596）で、彼はミケランジェロの弟子である。樽型の丸天井は 7 つの部分に分けられ、南北には半円の壁があるが、学院に接する北側の壁には哲学が、尼僧院に接する南側の壁には神学が描かれている。哲学を表象する女性（personification）の前には地球を表わす球体が置かれ、彼女はソクラテス、プラトン、アリストテレス、セネカと話を交わしている。そして、天井には順に文法、修辞学、論理学、算術、音楽、幾何学、天文学という 7 自由学芸が描かれ、これらを習熟すれば神学的完成に到達することを示している。そして、到達した結果を示す南の壁には頭上で冠が強い光により浮かんでいる神学を表象する女性が、教会の中で聖ヒエロニムス、聖アンブロシウス、聖アウグスティヌス、聖グレゴリウスを従えている図が描かれている。神学の指先には聖書があり、その頁には、信仰が幸福への道を照らす力が示されているという。7 自由学芸もまた女性が表象しており、彼女らはそれぞれ象徴的な持ち物を持っている。例えば、文法は月桂冠と石突きを持ち、生徒へのあめと鞭を表わしている。天井画から両側に下がる面には人物が描かれており、文法の場合、西側にはポンペイウス、ヴァロという二人の文法学者が、東側にはドナトゥスとネブリハという二人の文法学者が描かれている。また、列柱の間には大プリニウスとリヴィウスが描かれている。他の学問の場合も同様で、天井には personification の女性の絵が、そこから下がる両側には二人ずつ代表的な人物が描かれている。

第 3 章ではさらにその下の壁に描かれた絵画が紹介される。哲学の下にはアテナイの学院でアカデミア派のソクラテスとストア派のゼノンが論争している場面が描かれており、神学の下はニカイア公会議の場面が描かれている。7 自由学芸の場合も同じで、下部の両側の壁には、それぞれの学問に適した歴史画が描かれている。例えば、文法は西側の壁にはバベルの塔の建設場面が、東側の壁にはダニエルがカルデア語を教えている場面が描かれており、他の学問でも同じように両側に歴史画が描かれている。

もちろんこうした図像を使ったのはエスコリアル図書館が最初ではないし、その解説もクレマンが最初ではない。1626 年に刊行されたバルナバ修道会士 Cristoforo Giarda（1595-1649）の著作『アレクサンドリア図書館の象徴画像（*Bibliothecae Alexandrinae icones symbolicae*）』[22] はミラノのバルナバ修道会アレクサンドリア図書館内に図書分類[23]に対応するように配置されている 16 の擬人像について、その寓意を図像学的に説明した本である。冒頭[24]では象徴の卓越した点について、以下のようなことが述べられている。高尚な学問・技芸ほど抽象が進んでいるので、感覚では捉えにくくなるが、象徴的形象を用いることで、甘美さが生じ、賛美の念をもたらす。それは古代から用いられてきた抽象的な内容を伝達する知恵であった。

第 4 章は別に置かれた 2 つの部屋について記されている。エスコリアルでは俗語で書かれた本は別置され、写本もまた別置されている。俗語については、フィリップ 2 世はスペイン語の本はすべて集めようとしたという。写本はギリシア語、ラテン語だけでなく、ヘブラ語、アラビア語、イタリア語、トルコ語、ペルシア語のものも収集されており、中国の印刷物もあると記されている。第 5 章は図書の配架についてある。エスコリアル図書館の分類体系は 60 項目[25]に分かれ、文法を筆頭にまず自由学芸 3 科（trivium）などの言語関係が並び、その後に算術・幾何学・音楽・天文学などの 4 科（quadrivium）、以下、哲学、法学、神学の細分項目が続くが、中には記憶術、予言、遠近法、廷臣論、狩猟、潜水術、軍事といった項目もある。この分類体系は人文主義者 Benito Arias Montano[26]（1527-1598）による

もので、彼は蔵書の収集にも力を尽くしたことが次章で記されている。第 6 章は書籍収集の経緯が語られる。蔵書はまずフィリップ 2 世のコレクションを移すことから始まり、外交官で蔵書家である Diego Hurtado de Mendoza（1503?-1575）のコレクションの遺贈[27]、大司教で愛書家でもある Antonio Agustín（1517-1586）の所蔵する写本類の寄贈、そして上記の B. A. モンタノによる収集[28]などが大きなウェイトを占めている。そして最終章では貴重資料として、イエズスの聖テレジアの著作やアラビア語のイスラム写本のことなどが語られている。フィリップ 2 世は貴重な写本[29]の収集に力をそそいだ。

以下では、クレマンのこの本の後世での評価について書いておこう。筆者が長らくこの本を見つけられなかったように、クレマンはガブリエル・ノーデなどに比べると認知度が低く、忘れられた人物のように思われる。1704 年にイエズス会士 Claude-François Ménéstrier（1631-1705）が良書のガイドを目的として書いた『好奇・有益書誌(*Bibliothèque curieuse et instructive*)』[30]ではクレマンの履歴を簡単に紹介[31]した後に本書のことをイエズス会での意欲的な研究とみなしている。しかし、前号でも紹介した A. バイエ（1649-1706）は『最も著名な学者達の主著の判定(*Jugemens des scavans sur les principaux ouvrages des auteurs les plus connus*)』(1685-86) の t.2, pt.1(1685)で、「この本には何某かの博識はあるが、おしゃべりが多く、いわゆる雑然とした堆積(fatras)が多い」[32]とこきおろしている。さらに、ドイツの神学者 David Clément (1701-1760)は『稀覯書誌(*Bibliothèque curieuse historique et critique*)』(1750-1760)の t.7(1757)で「この著者は理解していない事柄まで盛り沢山に書くのが習慣になっている。この悲しい癖が役に立たない余談や不適切な博識の堆積に満ち満ちた大部の著作を生み出してしまい、読者は教えられたり、あるいは好奇心を満たす代わりに、忍耐と向き合わなければならない。」[33]と記したし、イギリスの書誌学者 Thomas Frognall Dibdin（1776-1847）となると「“空騒ぎ”とまでは言わないまでも、少なくともインクと紙の無駄使いである」[34]と書いている。こうした悪評はイエズス会の凋落が背景にあると思われるが、20 世紀に入ると美術史で図像学の重要性が再認識され、細部にこだわるワールブルク学派などが脚光を浴びることとなった。

実際のところ、クレマンが書いた図書館装飾はヨーロッパ中の図書館に定着し、19 世紀の図書館にまで影響を与えている[35]。1830 年の 7 月革命を描いた「民衆を導く自由の女神」で有名な画家 E. ドラクロワ（1798-1863）は 1847 年、ブルボン宮殿内に置かれた元老院図書館（bibliothèque du Sénat）の天井画を完成させたが、5 つの丸天井には科学、哲学・歴史、法学、神学、詩学を表わすような、それぞれ 4 枚の絵が描かれた。例えば、科学は「ペルシア王の贈り物を断るヒポクラテス」「兵士に殺されるアルキメデス」「アレキンダー大王から送られてきた動物を描くアリストテレス」「大プリニウスの死」、哲学は「マギ達に伝承を質問するヘロドトス」「天文学の発明者であるカルデア人羊飼い達」「ソクラテスと悪霊達」「静脈を切るセネカ」が描かれている。最初の計画では科学のヒポクラテスと大プリニウスはガリレオとニュートン、哲学・歴史はピタゴラス、デカルト、タキトゥス、ツキディデスの予定であったという。また法学は、もとは芸術としてラファエロやミケランジェロ、ルーベンス、プッサンを描く予定であったし、神学や詩学でも変更がなされた。現代的なものを廃し、すべてを古代のものに変えたわけであるが、ここには終着点が見えないまま政権交代が繰り返されるフランス革命の行方への批判があるという[36]。パリの国立図書館は 1868 年に H. ラブルースト(1801-1875) 設計の円形閲覧室が完成する[37]が、装飾を担当した画家 Alexandre Desgoffe（1805-1882）は壁にはフレスコ画を、天井の周りにはラシーヌ、ボッカチオ、セルヴァンテスなど 36 人の円形浮彫の肖像を一周するように配置した。

海を越えて、アメリカの図書館でもこうした装飾が行なわれている。1895 年に完成したボストン公共図書館の McKim Building[38] は、階段周りの装飾をフランスの画家 P. ピュヴィ・ドゥ・シャヴァンヌ（1824-1898）に依頼し、まず 1895 年に大きな「霊感を与える女神たちが光の死者である精霊を迎える図」が搬入され、翌年には「ヴェルギリウス」「アイスキュロス」「ホメロス」「哲学」「天文学」「歴史」「化学」「物理学」を描いた 8 枚の絵が搬入された。これらの絵とその寓意については Boston Public Library のホームページで見ることが出来る。また、1897 年には米国議会図書館の Thomas Jefferson Building が完成している。この建物は 1893 年のシカゴ万国博を手掛けたアメリカ人建築家・芸術家たちのデザインによるもので、彫刻、壁画、モザイク画を組み合わせた華麗な装飾がなされている。その内容については米国議会図書館のホームページ中の On these walls Thomas Jefferson Building – Online Tours などで知ることができる。また、完成後の 1901 年と 1902 年には写真集が刊行された [39]。

2. イエズス会の図書館論

ここでイエズス会の図書館論について少し書いておこう。イエズス会の図書館管理規則（Regulae praefecti bibliothecae）は 12 条から成り、本文は 1805 年にローマで刊行された『イエズス会司祭規則(*Regulae sacerdotum Societatis Jesu*)』等に再録されており、この本は Google Books で読める。イエズス会は図書館を重要な教育機関と位置づけ、本を学問体系に従って排列することなどが規定されているが、どういう本が有用で教育に必須であるかを示すため、1593 年にイエズス会士 Antonio Possevino（1533-1611）は『選択書誌(*Bibliotheca selecta*)』[40] という本を書いた。これは、ゲスナーの『万有書誌(*Bibliotheca universalis*)』のような、あらゆる本の記述を目指すものではなく、そのうちの良書を明確にするという意図によるもので、それは反宗教改革のオピニオンリーダーを自負するイエズス会の役割に沿うものであった。1603 年には新版が刊行され、一部内容も変更されている。初版第 1 部第 1 書第 12 章(pp.56-65)[41]で良書の概念を読書・修正・文章・検閲・編集・流布といった観点から検討するとともに、図書館での本の配列についても書かれており、聖典、哲学、医学、民法、歴史、弁論・詩・文法、参考図書類の 7 分類とするよう述べている。これは神学・哲学・医学・法学などの当時の教育機関の学部構成に対応しており、クレマンが『博物館、あるいは図書館』で記した体系も似た構造である。第 2 書以下では主題をさらに細かにして論じられている大きな著作である。

デカルトの例 [42]に見られるように、フランスのイエズス会は教育に熱心で、多数の知識人を輩出している。1678 年にイエズス会士 Jean Garnier（1612-1681）は『パリのイエズス会学院図書館の分類体系(*Systema bibliothecae Collegii Parisiensis Societatis Jesu*)』[43]という 118 頁の本を刊行しており、Google Books で読める。当時、同図書館は 3 万 2 千冊の図書を新旧 2 館の建物に蔵していた。本書によれば、イエズス会学院図書館の分類体系は神学・哲学・歴史・法学の大項目に分かれ、旧館に神学と法学の本が、新館に歴史と法学の本が配置されている。そして神学は聖書、語彙・批評・注釈、新旧聖書注解、旧約・新約のみの注解、ギリシア語・ラテン語両方の教父全集、ギリシア教父、ラテン教父、ソコラ神学、神学論争、道徳･堕落、禁欲、民衆演説という 12 の細分が、哲学は哲学、数学、文法、演説、詩、文献学という 7 つの細分がされている。一方、歴史は地理、年代学、教会･政治両方の普遍史、教会の普遍史、個別の教会史、教団史、修道院史、ギリシア史、ローマ史、イタリア史、フランス史、スペイン史、ドイツ史、ベルギー史、イギリス史、デンマーク・スウェーデン等北国史、トルコ・ハンガリー・ポーランド・ロシア地方史、新大陸史、

異教国史、文献史、図像史、博物誌、人造物誌、神話誌という 24 の細分が、法学は法王庁会議文書、教会法、ローマ民法、フランス法、その他の国法、万民法という 6 つの細分がされており、さらに新館には写本を蔵する部屋と異教やプロテスタントの文献を蔵する部屋が別に置かれていた。

このように、イエズス会の図書館はカトリック神学の本が中心になっているとはいえ、全分野の知識を決められた順番に従ってきちんと進める教育が行なわれたため、科学分野の本も充実しており、科学革命と呼ばれる 17 世紀の学者にはイエズス会教育を受けた人物も多い。

3. 16-18 世紀の図書分類体系

これまでのところで図書の配架の話が多く出てきた。以下では 16 世紀以後の図書分類体系について書いてみる。エスコリアル図書館と同時代のカトリック図書館であるヴァティカン図書館については前出の A. ロッカ『ヴァティカン使徒図書館』にその記述[44]があり、以下の 10 区分が用いられたという。1. 聖書・神学、2. 哲学（自然学・政治・倫理・経済・論理学などを含む）、3. 数学（天文学・幾何学・地理学・音楽・算術などを含む）、4. 医学、5. 法学、6. ヘブライ語・ギリシア語文献（文法・辞書を含む）、7. ラテン文学（文法・辞書を含む）、8. 工芸（軍事・農業・建築・絵画・彫刻・狩猟などを含む）、9. その他（婚姻・廷臣・水泳術・料理を含む）、10. 雑（miscellanea）。ロッカ自身が蔵書家で、それを基にして 1604 年に一般公開する図書館としてヴァティカンの近くに Bibliotheca Angelica を開設した。1608 年には『アンジェリカ図書館（*Bibliotheca Angelica*）』[45]を刊行して、その図書館の分類体系を細かく説明しているが、若干の順番の入れ替えはあるにせよ、大まかな体系はヴァティカンのものとほぼ同じである。

1572 年に設立されたウォルフェンビュッテルのアウグスト公図書館（Herzog August Bibliothek）は 17 世紀に入ると蔵書目録[46]の刊行が課題となっていた。この問題について、博識家（Polyhistor）として知られた Hermann Conring[47]（1606-1681）は本好きの政治家であるボイネブルク男爵 Johann Christian[48]（1622-1672）に宛てた書簡『アウグスト公図書館について（*De Bibliotheca Augusta*）』[49]（1661）を書いた。この本でコンリングは図書館の基本、完成形、技術、蔵書規模、図書の質などを論じている。末尾にアウグスト公図書館の 1661 年 4 月現在の分類項目毎の蔵書数が載っているが、その分類体系は 1. 神学、2. 法学、3. 歴史、4. 軍事、5. 政治学、6. 経済学、7. 倫理学、8. 医学、9. 地理学、10. 天文学、11. 音楽、12. 物理学、13. 幾何学、14. 数学、15. 詩学、16. 論理学、17. 修辞学、18. 文法、19. その他、20. 写本となっており、蔵書数は 28,415 巻 116,351 冊と記されている。

1675-84 年にフランス王室図書館の目録作成を担当した Nicolas Clément（1647-1712）は 23 項目に分類する目録を作成した（印刷はされていない）が、その分類体系は A. 聖書、B. 祈祷書、C. 教父、D. 神学、E. 公会議・教会法、F. 民法、G. 地理・年代学、H. 教会史、I. ギリシア・ローマ史、K. イタリア史、L. ドイツ・ベルギー史、M. フランス史、N. イギリス史、O. スペイン・アフリカ・アジア・アメリカ史、P. その他の歴史・伝記、Q. 書誌、R. 哲学・政治、S. 博物誌、T. 医学、V. 数学、X. 文法・演説・語彙、Y. 詩・好色本・巷説、Z. 文献学・盛儀・寓意となっている[50]。なぜ23項目かといえば、アルファベットをすべて使う（古代ローマでは J,U,W は使用しない）ためで、後継のフランス国立図書館は、この体系を修正しながら使い続けた。

現フィレンツェ国立中央図書館の前身のひとつであるマリャベキアーナ図書館は Anton Magliabechi[51]（1633-1714）の蔵書を基に 1747 年に一般公開された図書館で、公開に至るまでの歴代司書の課題は目録の作成であった。1737-38 年に医学者 Antonio Cocchi[52]

(1695-1758) が作成した分類体系の自筆原稿が残されており[53]、没後に刊行された著作[54]では活字化されている。それは以下のような 40 項目からなる分類体系である。1. ラテン語文法・辞書、2. 同ギリシア語、3. 同オリエント諸語、4. 同近代語、5. 論理学・形而上学・記憶術、6. 演説・雄弁・対話・短編、7. 詩・詩学、8. 批評・雑録・書簡、9. 文学書・新聞、10. 書誌・目録、11. 数学、12. 物理学・哲学一般、13. 地理学・紀行、14. 博物誌、15. 医学・外科学・解剖学・装蹄術、16. 化学、17. 建築・絵画・器械、18. 印刷、19. その他の技術、20. 占星術・手相術等、21. 道徳哲学・騎士道、22. 年代学、歴史学・普遍史、23. 古代史 (6 世紀まで)、24.6 世紀以降のイタリア以外の歴史、25. 6 世紀以降のイタリア史、26. 家計・軍事、27. 祝祭・葬儀・婚礼等、28. 考古学、29. 民法・刑法 30. 裁判・政治、31. 教会法・教会規律、32. 公会議・布告・勅令、33. 道徳神学・良心の問題、34. スコラ学・教理・論争、35. 説教・禁欲・雄弁術、36. 典礼、37. 教会史・古代教会・聖地、38. 聖人伝、39. 教父、40. 聖書・聖書解釈。この体系は 10 個がひとかたまりで、1-10 が言語・論理学の、11-20 が科学の、21-30 が歴史・法律の、31-40 が宗教のカテゴリーである。A. コッキは後述する J. ロックの学問分類から着想を得たという。

現ザクセン州立・ドレスデン工科大学図書館 (SLUB) の所蔵する Heinrich von Bünau 伯爵(1697-1762) 旧蔵書の目録 *Catalogus Bibliothecae Bunavianse* (3 巻 7 冊) は Johann Michael Francke (1717-1775) が編纂した分類目録で、Herzogin Anna Amalia Bibliothek の電子図書館 Monographien Digital で閲覧できる。その分類体系を目録の巻号に沿って記すと以下の通りである[55]。T.1(古代の聖・俗の著作) pt.1(聖典、ギリシア古典、ローマ古典、ユダヤ・イスラム経典、その他) pt.2(一般文献史、個別文献史、学芸史、図書館史、学術・教育史、学者の伝記、その他の文献史、研究法) pt.3(文献学、書簡、修辞・弁論、詩) T.2(歴史) pt.1(歴史学一般、宇宙誌・地理学、家系学、紋章学、年代学、普遍史) pt.2(古代オリエント史、古代ギリシア史、古代ローマ史、ビザンツ史) pt.3(考古学—古代ヘブライ、古代エジプト・シリア・カルデア・ペルシア etc.、古代ギリシア、古代ローマ、古代彫像・宝石・絵画、古代碑文、古銭学) T.3(キリスト教史) pt.1(新旧聖書、旧約時代の教会史) pt.2(教父、公会議・会談) pt.3(新約時代の教会史、キリスト教遺物、法王庁史、教団史、殉教史、宗教改革史、東方・スラブ教会史) 。分類項目は巻(T)> 部(pt)> 書(lib)> 章(cap)> 節(sec)の階層構造でさらに細分されており、その細かな体系は各巻の冒頭に conspectus として示されている。フランケの序文によると、第 4 巻にはイタリア・ドイツ史を、第 5-6 巻にはスペイン・フランス・イギリス・その他の歴史を収録する予定であったが、未完のままとなった。この細かな分類体系は 19 世紀ドイツの図書館学者 F. A. エーベルト (1791-1834) が絶賛し、自らの分類理論の土台とした。

図書収集は書籍業者を経て行なわれ、彼らの作るカタログは重要な情報源であった。パリの書籍商 Gabriel Martin (1679?-1761)の作った目録[56]の分類体系が非常に流布したものであったことは、ディドロ・ダランベールの『百科全書(*Encyclopédie*)』第 2 巻(1752)の項目「Catalogue」を書いた書籍商 Michel-Antoine David (c.1707-1769)がマルタンの分類体系を詳しく説明していることからもわかる[57]。その体系は神学、法学、学芸、文芸、歴史という 5 つの大項目の下で細分がなされるもので、学芸には哲学・医学・数学・美術・工芸が含まれ、文芸には文法・修辞学・詩学・文献学・文学作品が含まれる。ダヴィッドは後半では Gabriel Girard (d.1748)の提案した 6 大項目の体系を説明している。それは法学を規範学 (nomologie) に変えてさまざまな規範や倫理なども含むものとし、歴史を歴史記述学 (histoliographie) に変えて伝記や回想録、フィクション等の作品もここに含めることとした。また、学芸を哲学と技術に分け、文芸を文献学に変えている。ここには、百科全書

派の思想の反映が見られる。

啓蒙の時代といわれる 18 世紀に登場してきた百科全書類は、あらゆる知識が合理的に説明できる体系を土台に組み立てられており、まずその原理を説明している。1728 年に刊行された Ephraim Chambers（c.1680-1740）の *Cyclopaedia* は哲学者 J. ロック（1632-1704）の『人間悟性論』[58]の影響を受けた知識の体系図[59]を載せ、各学問の位置を示した。一方、ディドロ・ダランベールの『百科全書』は哲学者 F. ベーコン（1561-1626）の『学問の進歩』[60]の影響を受けながら、それを発展させた「人間知識の系統図」[61]を載せている。この図式に影響を受けたミラノのブライデンセ図書館長 Giulio Ferrario（1767-1847）は 1802 年に *Progetto per un catalogo bibliografico secondo il sistema delle cognizioni umane di Bacone e D' Alembert* という小冊子を刊行しているが、この本は今のところネットでは見つからない。ロックとベーコンの大きな違いは、ロックでは文学や歴史が学問として扱われていないことである。実際、18 世紀の百科全書類の多くは、現代の百科事典とは違って、伝記的事項や歴史的事項があまり扱われておらず、別に歴史辞典が作られたという[62]。

4. フランス革命期の図書分類体系

図書館での図書分類体系はフランス革命期より大きな変化を見せ始める。革命により大量の図書が国有化され、市民に公開するべきものとなった。読者層の拡大が目指されたわけである。そのために目録をどう変えたらよいかという論議をパリの国立学術院（Institut national des sciences et arts）で行なったのが歴史家 Hubert Pascal Ameilhon（1730-1811）と政治家 Armand Gaston Camus（1740-1804）であった。H. P. アメイロン[63]は 1796 年に、従来から図書分類の筆頭項目に置かれたキリスト教神学は、信教の自由という観点からしてふさわしくなく、それに代わって文法を筆頭にすべきと論じた。また、政教分離の観点から教会法は法学に含めないこと、神観念は形而上学に含めることなどを述べ、全国の図書館で用いるべき新しい分類体系の必要性を訴えている。これを受けて A. G. カミュ[64]は、まず前号で紹介したトレフラーの『方法』での分類体系から始めてクレマン、Michael Denis[65]（1729-1800）、マルタンなどの分類体系を概説しているが、その中で、クレマンがエスコリアル図書館の分類ではアメイロンの主張通り文法が筆頭項目であると書いていることに驚いている。そして自分は、主な分類項目は何か、その筆頭項目は何か、及び、複数の主題が書かれた本をどう分類するかという点に限って議論すると断り、まず文法が筆頭であるかどうかについては否定的見解を述べる。確かに、本を読む前に読み方を知る必要はあるが、それが文法というわけではない。むしろ、本とは何かを知るのが第一で、それが書誌である。それに続く分類項目については知識に餓えた人間を想定すると良い。まず彼は宇宙全体に興味を持ち、次に人間の本性に移る。それには過去の人間・学問・技芸について知らなければならない。しかし、人は息抜きも必要であり、それが文芸であるが、その中に社会の中に暮らす孤独な個人を見出す。そして社会に関する知識（法律、経済など）が必要となり、最後に必要な知識としての人間の通史にたどりつく、というのがカミュの構図である。複数の主題の本の分類については、本の知識は 2 種類あり、物としての本（判型や活字、誤植、価格など）に関心があるものと、教育にふさわしい本（論述の深さ・発展性など）に関心があるものに分かれる。前者は金持ちに見られるように、本をただ並べておくだけのことであり、図書館は後者の立場で本の知識を提供すべきである。それが主題の問題を解決する、とした。分出記入を示唆したものであろう。

こうした議論の中で、新しい分類体系の試案を作っていたのが歴史家 Pierre Claude

François Daunou（1761-1840）である。ドーヌーは共和国３年憲法（1795）の起草者のひとりで、ドーヌー法と呼ばれる「公教育組織に関する法令」（案）の提出者である。この法律[66]は 1795 年 10 月 25 日に成立した。彼は 1800 年に国立学術院で分類体系について論じたというが、その内容は刊行されていない。しかし、自分の蔵書をその体系で分類しており、その体系で作られたドーヌー蔵書の売立目録[67]が没後に刊行された。以下にその分類体系を書いておこう。予備（書誌、文献史）、1 門 : 文芸（言語、散文、詩、文集）、2 門 : 歴史（予備、古代・現代人民史、宗教史、歴史補助学）、3 門 : 哲学（哲学一般・道徳・政治学、自然科学・数学）、4 門 : 技芸（農業・工芸・絵画・音楽）、5 門 : 医学、6 門 : 法学、7 門 : 神学（キリスト教神学、その他の神学）、補遺（叢書・雑誌・古典）。最初の「予備」に書誌を置いたのはカミュの見解に従ったものであろう。

フランス革命の意味を踏まえて学問分類を考えた人物に社会学者 Auguste Comte（1798-1857）がいる。彼は 6 巻からなる著作『実証哲学講義（*Cours de philosophie positive*）』[68]第 1 巻で、3 段階の法則というものを説明する。人間の精神は、神学的（フィクション的）段階、形而上学的（抽象的）段階、科学的（実証的）段階という 3 段階を経て進歩してきた。これに対応するように、学問も進歩してきた。しかし、各学問は実証性の完成度が異なり、数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学の順に完成度が高い。コントの目標は、革命を経た今、出来るだけすみやかに人類を実証的段階にすることで、それが革命の終着点なのである。ここには実証性を持たない文学や芸術、宗教は登場しない。コントは後年、『実証政治学体系』を著し、第 7 の科学としての倫理学を重視して「人類教」を謳いあげるようになったが、図書分類に影響を与えるにはいたらなかった。

以上のような議論はあったが、19 世紀に入ってもマルタンの分類は依然として使われ続けた。稀覯書の書誌として有名な Jacques Charles Brunet（1780-1876）の *Manuel du libraire et de l' amateur de livres* は 1810 年の初版以来改訂が続けられ、1860-65 年には第 5 版[69]が出ている。本体は著者のアルファベット順排列の書誌であるが、最後の巻は分類索引（Table méthodique）となっており、冒頭に Ordre des divisions de la Table méthodique という分類表が載っているが、その分量は初版では 7 頁であったが、第 5 版では 13 頁となっており、かなり細かな細分がなされている。

フランス革命はヨーロッパ中に飛び火し、社会体制の変革をもたらしたが、図書分類についても国外に影響を与えた。ここではイタリアの例[70]を見ておこう。トリエステの貴族 Domenico Rossetti（1774-1842）は 1812 年に「sofografia の前触れ」という講義[71]を行なった。sofografia とは sofo（賢人）と grafia（ギリシア語の「記述した」）を合わせた造語で、知識・学問の一覧を提示したものを意味し、図書分類にも応用できるものとして考えられた。まず、あらゆる個人を対象とする基礎学として教育学、言語学（eulogia）、修辞学、自然学（fisiografia）、数学、歴史学の 6 つが、さらにそれを伸ばす学として sofografia、技術・工芸、文献学、審美学（callilogia）、医学、法学、慣習学（nomologia）、神学、哲学の 9 つがあげられている。ここでの sofografia とは基礎学を完全なものにするための学と定義されており、その中にある図書学（bibliologia）の下位区分として図書館学や書誌学なども含まれている。他の学も下位区分が細かくなされており、全部で 702 の下位項目が示されている。

Lorenzo Ilari（1788-1849）は 1844-48 年に 7 巻（8 冊）からなるシエナ公共図書館の蔵書目録を編纂したが、その第 1 巻冒頭に分類体系が示されている[72]。体系は 7 つの大項目からなり、その下に 120 の sezioni があるが、概要は以下の通りである。1. 文芸（文法、語彙、詩、文献学、各国文学など）、2. 道徳科学（緒論、論理学、法学、政治・経済学など）、3. 精密科学（数学、力学、天文学、軍事など）、4. 物理科学（物理学、化学、博物誌、生物学、

解剖学、生理学、病理学など)、5. 神学(聖書、公会議、典礼、教父、神学など)、6. 歴史(地理学、紀行、年代学、古代史、イタリア近代史、その他各国史など)、7. 諸芸(農業、鉱業、芸術など)。

Giuseppe Cardile (b.1829) は 1850 年に『書誌学の基本研究(*Studj fondamentali della scienza bibliografia*)』[73]という本を刊行した。フランス革命はフランスでの図書館員不足を明るみに出し、書誌学の教科書が多く出版されるようになっていた。その流れはイタリアにもおよび、パレルモ公共図書館司書のカルディーレは、書誌学を諸学への入り口とみなす前出の A. G. カミュの影響を受けた。学問は必須のもの (necessarie) と有用なもの (utili) に分かれ、前者には文芸、イデオロギー、形而上学、法学、医学が、後者には数学、技術、神学が入る。そして、それを繋ぐものに多面的著作・全集、稀覯書、写本があるとした。この本は残念ながらネットには見当たらない。

Francesco Palermo (1800-1874) は前出のマリャベキアーナ図書館とトスカナ宮図書館 (Biblioteca Palatina) の統合に尽力した図書館員であるが、統合の 7 年前、1854 年に『トスカナ宮図書館の図書分類(*Classazioni dei libri a stampa dell' I. e R. Palatina*)』[74]という本を刊行している。まず、プラトンからアンペールまでの知識分類体系を振り返り、彼自身の知識分類体系を発表している。それによると、知識はまず真と美の二つの観点で分かれる。真は宗教的と合理的のふたつに分かれ、美は思索的と行為的の二つに分かれる。さらに、合理的真も思索的と行為的の二つに分かれ、思索的真は哲学的、数学的、自然科学的の三つに分かれる。この樹形はさらに細かく分かれて行き、宗教、文学、哲学、物質界、個人的世界、社会的世界、美的世界、産業界などでの知識細分が示されている。そして、これを図書館分類に応用したとして、345 頁にわたって非常に細かい分類体系が書かれており、末尾には項目の索引が付けられている。

現在使われているデューイ十進分類法や LC 分類の祖形であるカッター展開分類法は 19 世紀末に登場してくる[75]。そして、それらを待つように James Duff Brown[76] (1862-1914) や Ernest Cushing Richardson[77] (1860-1939) による分類理論や分類体系の歴史を記した著作が刊行された。これらの本は本稿で紹介した以上に数多くの分類体系を紹介している。

5. 書誌(bibliography)のマクロとミクロ

本稿の出発点は、イギリスの書誌学レクチャーで図書館建築が取り上げられており、そこで筆者が C. クレマンに興味を持ったということであった。その時、書誌学はそんなことにも関係しているのかというのが筆者の感想であったが、この背景には書誌学と図書館学の違いは何かという問題が横たわっている。最後に、書誌学と図書館学の関係について少し書いてみる。イギリスの書誌学会 Bibliographical Society は 1892 年に設立されているが、その機関誌は *The Library* というタイトルである[78]。この雑誌は 1889 年に John Young Walker MacAlister (1856-1925) が自らの費用で創刊し、The organ of the Library Association of the United Kingdom とサブタイトルにあるように英国図書館協会[79]の機関誌でもあった。当初は書誌学的論文も図書館協会の機関誌に発表されていたわけである。書誌学会が設立されると 1893 年には *Transactions of the Bibliographical Society* が創刊され、そちらにも R. Proctor や W. W. Greg らの論文が発表されるようになる。その内容は活字の形や白紙の有無といった本の物理的状態に関するものが多くなっていた。一方、1898 年に英国図書館協会は *The Library Association record* を創刊し、図書館記事は *The Library* からなくなってしまう。

こうした中で前出の J. D. ブラウンは *The Library*, Ser. 2, v. 5(1904) に 'Practical

bibliography’という論文を発表した。その中で、あまりにも本の物質的側面のみにこだわるイギリス書誌学に対して、もう少し practical であるべきであると難じたのである。当時、インキュナブラの印刷者を同定する方法が発達し、インキュナブラ目録の作成が盛んになってきていたが、これらの目録は、その本の内容にほとんど関心を示しておらず、15 世紀にどんな主題の本が刊行されたか分かるようになっていない。本の中身を知っている図書館員がいなくなった。書誌学者はほんの少数の好事家向けの仕事をしているだけである。もっと彼らは詳細な主題書誌の作成など世間に有用な仕事に目を向けるべきである、というのが彼の主張であった。この論文を受け取った *The Library* の編集者は、書誌学者側の反応が必要と考えて、大英博物館の Alfred William Pollard [80]（1859-1944）に寄稿を求め、この論文の後半はポラードの回答という形になっている。ポラードの言い分は、書誌学者全員がそうした重箱の隅をつつくような自分勝手な仕事をしているわけではない。書誌学者の仕事は世間が求めているはずの真理の追究が目的であり、好事家のための仕事ではない。インキュナブラの主題書誌というが、15 世紀を現代の目で見てはいけないのであって、主題書誌は各分野の専門家に任せ、書誌学者はかつて存在した本の列挙を重視するべきである、という風な議論がなされた。

私見では、ブラウンは本をマクロの目で見、ポラードはミクロの目で見ているように思われる。かつて、書物は高価で数も少なく、読者も限られており、コレクターのみが収集に熱狂するものであった。それが、19 世紀後半に入ると、極端に数が増え、読者層も拡大した。本は 1 冊 1 冊の違いにこだわるものではなく、その中身と有用性だけが重要であり、ビジネスの対象として時代に敏感に反応する存在となった。こうした中で、図書館学は本をマクロの視点でとらえる学問として、資料の増大・多様化への対応に追われてきたわけで、1 冊 1 冊の違いにこだわる書誌学的な視点が図書館では希薄になってきている。物質的な側面が目に見えない（本文の変更の証拠が分かりにくい）電子資料ばかりを扱うようになると、こうしたミクロな視点がさらに持ち難くなるのではないだろうか。

おわりに

最後に、今回もまた A. セライ著 *Storia della bibliografia* と、さらに同じ著者の *Le classificazioni* [81] を参考にしたことを付け加えておく。また、Rudof Blum の *Bibliographia* [82] もよく使わせてもらった。本稿はクレマンを批判したバイエやディブディンに言わせれば fatras（仏語）とかインクと紙の無駄使いということになろうが、ネット情報全体がそのようなものになりつつあると感じながら、ネットを検索しているところである。

---

1) Masson, André et Paul Salvan『図書館』[*Les bibliothèques*] 小林宏訳 , 白水社 , 1969, p.49.

2) Masson, André. *The pictorial catalogue; mural decoration in libraries*. Tr. by David Gerard. Oxford, Clarendon Press, 1981. 本書はオックスフォード大学で 1952/53 年度から開かれている書誌学レクチャーの 1972/73 年度の講義 ‘Le catalogue figuratif’ ; a pictorial guide to the contents of European libraries from the fifteenth to the eighteenth century を単行本化したものである。この Lyell lectures in bibliography はそれまでに Ker、Greg、Bowers、Pollard、Munby といった重鎮たちが行なっていた。ちなみに、図書館建築史で有名な J. W. Clark: *The care of books*（1901）はケンブリッジ大学で 1895 年から開かれている Sandars lectures の 1899 年の講義を単行本としたもので、イギリス書誌学は図書館建築もその研究対象としている。

3) Masson, André. *Le décor des bibliothèques du moyen âge à la Révolution*. Genève,

Droz, 1972. 出版されたばかりの本書に注目したボードリアン図書館長 Robert Shackleton (1919-1986) がその年のライエル書誌学講義にマソンを招いたわけである。

[4] Clément, Claude. *Musei, sive Bibliothecae, tam privatae quam publicae extructio, instructio, cura, usus; libri IV; accessit accurate descriptio Regiae Bibliothecae S. Laurentii Escurialis*・・・. Lugduni, Iacobi Prost, 1635.

[5] コンプルテンセ大学（マドリッド)、ローマ国立中央図書館、フィレンツェ国立中央図書館、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校、バイエルン州立図書館（ミュンヘン)、国立図書館情報学高等学院 enssib（リヨン）等の所蔵するコピーが Google Books、 HathiTrust Digital Library、MDZ Digitale Bibliothek、Gallica などの電子図書館で閲覧できる。

[6] 本書はラテン語で書かれており、筆者の語学力では精読は無理なので、以下の文献も参考にしている。Serrai, Alfredo. *Storia della bibliografia V : trattatistica biblioteconomia*. Roma, Bulzoni, 1993, p. 273-294. Rovelstad, Mathilde V. “Claude Clement’ s pictorial catalog,” *Library quarterly*, Vol.61, No.2, 1991, p. 174-187. Rovelstad, Mathilde V. “Two seventeenth-century library handbooks, two different library theories,” *Library & culture*, Vol.35, No. 4, Fall 2000, p.540-556.

[7] 原文のラテン語は以下の通り。① utilitas publica, ② eruditionis ostentatio, ③ comparanda eruditio, ④ animi voluptas, ⑤ morum instructio, ⑥ magnificentia ostentatio, ⑦ falsa eruditionis ostentatio, ⑧ nobilium ingeniorum consecratio

[8] 前号で書いたように、当時、件名は loci communes と呼ばれ、トレフラーやゲスナーは loci communes の目録や索引を作成した。

[9] 例えば deus という件名に関係するものとして sapientia, bonitas, potentia, justitia が掲げられている。

[10] Locke, John. *Posthumous works*. London, A. and J. Churchill, 1706, p.314-336. この本は Google Books で読める。

[11] エスコリアル宮殿についてはラテン語、スペイン語の文献が多いが、筆者の語学力から、主に以下のような英語文献を参考にした。Rocca, Francis Xavier. *Cloister and court; the Escorial and Philip II of Spain*. Diss.—Yale University, 1998. 、Portuondo, Maria M. “The study of nature, philosophy, and the Royal Library of San Lorenzo of the Escorial,” *Renaissance quarterly*, Vol.63, 2010, p.1106-1150. 、Kamen, Henry. *The Escorial; art and power in the Renaissance*. New Haven, Yale University Press, 2010. 宮殿内には聖ラウレンティウス修道院が設置されているが、この名称はスペイン軍がサン・クェンティンの戦いに勝利した1557年8月10日が殉教者聖ラウレンティウスの祝祭日であったことに因むという。エスコリアル図書館の歴史については以下の文献がある。Vogel, E. G. “Einiges zur Geschichte der Escurialbibliothek unter Philipp II,” *Serapeum*, Bd. 8, No.17, Sept. 1847, p.273-285.

[12] この本は Biblioteca nacional de Portugal の Biblioteca nacional digital で閲覧できる。p.51-80 が該当箇所。

[13] De Sande, Eduardo. *De missione legatorum Japonensium ad Romanam curiam* ... Macao, 1590, p.201-212. 邦訳は『デ・サンデ天正遣欧使節記』泉井久之助ほか共訳 , 雄松堂書店 , 1979, p.338-347。

[14] これは Cardona, Juan Baulista. *De regia S. Laurentii bibliotheca, de Pontificia Vaticana; De expurgendis haereticor; Propriis nominib; De diptychis*. Tarracone, Philippum Mey, 1587. のことであるが、この本は現在のところネットには見当たらない。ただ、*De regia S. Laurentii bibliotheca* に つ い て は *Hispaniae bibliotheca, seu De academiis ac bibliothecis*. Andreas Schott [ed]. Francofurti, C. Marnium & haeredes I. Aubrii, 1608,

p.68-84. に再録されており、こちらは Google Books で読める。

[15] Sigüenza, José de. *Tercera parte de la Historia de la Orden de S. Geronimo, doctor de la iglesia*. Madrid, Imprenta Real, 1605. この本は Google Books で読める。なお、『聖ヒエロニムス会史』第 4 部は後任の Francisco de los Santos（d.1699）師が執筆した。このサントス師は、エスコリアル宮の部分だけについて記した *Descripcion breve del monasterio de S. Lorenzo de el Escorial* を 1657 年に刊行しており、同書は 67,81,98 年にも版を改めて刊行され、これらは Google Books や MDZ Digitale Bibliothek で読める。また、1671 年には 1657 年版の英語梗概が *The Escurial, or A description...lately consumed by fire* というタイトルで、1760 年には 1698 年版の全文英訳が *A description of the Royal Palace, and monastery of St. Laurence, called the Escurial...* というタイトルで、いずれもロンドンで刊行されており、これらは有料データベース EEBO、ECCO で読むことが出来る。

[16] 第 4 書は以下のタイトルでイタリア語訳が刊行されており、Google Books で読める。Mazzolari, Ilario. *Le reali grandezze dell' Escuriale di Spagna*. Bologna, G. B. Ferroni, 1648.

[17] Pansa, Muzio. *Della libraria Vaticana; ragionamento*. Roma, G. Martinell, 1590. 本書は Google Books で閲覧できる。

[18] Rocca, Angelo. *Bibliotheca Apostolica Vaticana a Sixto V. Pont. Max. in* ... Romae, Typographia Apostolica Vaticana, 1591. 本書は Google Books で閲覧できる。p.383-403 ではヨーロッパの図書館史が述べられ、p.386 にエスコリアル図書館についての記述がある。

[19] エスコリアル図書館の書棚については以下を参照のこと。Clark, John Willis. *The care of books; an essay on the development of libraries and their fittings, from the earliest times to the end of the eighteenth century*. Cambridge, at the University Press, 1901, p.267-271. この書棚は wall system と呼ばれ、アンブロジアーナ図書館、マザラン図書館、ボードリアン図書館へと広まっていったという。

[20] 壁画の写真や詳しい説明は以下を参照のこと。Garcia-Frias Checa, Carmen. *La pintura mural y de caballete en la Biblioteca del Real Monasterio de El Escorial*. Madrid, Patrimonio nacional, 1991.

[21] ペレグリノ・ティバルディがエスコリアルの壁画を描いたのは 1587-92 年のことであった。彼のスペインでの仕事については Scholz, Michael “New documents on Pellegrino Tibaldi in Spain,” *Burlington magazine*, Vol.126, No.981, Dec.1984, p.766-769. を参照のこと。

[22] Giarda, Cristoforo. *Bibliothecae Alexandrinae icons symbolicae...* Mediolani, ex typographia hered. Melchioris Malatestae, 1626. 本書は Google Books で読める。

[23] 聖書、神学、教会法、民法、自然哲学、道徳哲学、医学、外科学、修辞学、詩学、天文学、地理学、数学、建築学、歴史、博学の 16 分類。

[24] 冒頭部分は Gombrich, E. H.『シンボリック・イメージ』[*Symbolic images*] 大原ひとみほか訳 , 平凡社 , 1991, p.347-381. に邦訳が載っている。

[25] クレマンは 60 項目を掲げているが、シグエンツァ師の『聖ヒエロニムス会史』第 3 部（1605）p.773. では 64 項目となっている。医学、sitica、倫理学、絵画・彫刻、農業が加わり、一方、対照索引と oeconomiae loci communes の項目が合わせて 1 項目となっている。

[26] モンタノについては Bell, Aubrey F. G. *Benito Arias Montano*. [Oxford], Oxford University Press, 1922. を参照のこと。この本は Internet Archive で閲覧出来る。B. A. モンタノは 1568-73 年に、フィリップ 2 世の命によりアントワープに赴き、C. プランタンが五ヶ国語聖書（*Biblia polyglotta*）を印刷した際に、その校閲などを行なったことで知られる。また、彼はエスコリアルのフレスコ画の図像についてもアイデアを提供したと言われる。

[27] 1575 年 8 月 6 日付けの遺言書には全蔵書を王にささげると記されていた。約 800 点の写本が含

まれており、刊本の数量は、1671 年の火災で蔵書目録が焼失したため不明という。Hobson, Anthony. *Renaissance book collectiong; Jean Grolier and Diego Hurtado de Mendoza, their books and bindings*. Cambridge, Cambridge University Press, 1999, p.87-88.

[28] モンタノはアントワープに赴いた時、併せてエスコリアルのための図書収集を行なっていた。前掲 26）p.10-18. 参照。そして、エスコリアルの蔵書整理を行なったのも彼であった。

[29] 古い写本としては *De baptism parvuolum* というタイトルのアウグスティヌス自筆の写本やクリソストムのギリシア語写本などがあげられる。Santos, Francisco de los. *Descripcion del Real Monasterio de San Lorenzo de El Escorial*... Madrid, 1698, p.104.

[30] Ménéstrier, Claude-François. *Bibliothèque curieuse et instructive de divers ouvrages anciens & modernes, de litteratures & des arts*. Trevoux, J. Boudot, 1704.（2 v.）本書は Google Books で閲覧でき、該当箇所は t. 1, p.20-22。

[31] クレマンはフランスのフランシュ・コンテ州出身のイエズス会士で、リヨンのイエズス会学院で修辞学などを教えた後、マドリッドの王立学院へ教授として招かれ、ギリシア語、ラテン語を教えた。ポッセヴィーノの図書館論を発展させるつもりで書いたのが『博物館､又は図書館』である、とメネストリエは書いている。

[32] Baillet, Adrien. *Jugemens des scavans*... t.2, pt.1. Paris, A. Dezallier, 1685, p.273.

[33] Clément, David. *Bibliothèque curieuse historique et critique, ou Catalogue raisonné de livres dificiles à trouver*. t. 7. Leipsic, J. F. Gleditsch, 1757, p.185.

[34] Dibdin, Thomas Frognall. *Bibliomania, or book madness*. London, H. G. Bohn, 1842, p.39.

[35] パリの図書館装飾史については *Les bibliothèques parisiennes; architecture et décor*. Sous la dir. de Myriam Bacha et Christian Hottin. Paris, Action artistique de la ville de Paris, 2002. が詳しい。

[36] Hersey, G. L. “Delacroix’s imagery in the Palais Bourbon library,” *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, Vol.31, 1968, p.383-403.

[37] Labrouste, Léon. *La Bibliothèque nationale; son début et ses accroissement, ses batiment et ses constructions,* ... ［Paris, H. Lutier,］1885. を参照。本書は Gallica で閲覧できる。

[38] 建築家 Charles Follen McKim（1847-1909）が設計したので「マッキム館」と呼ばれた。マッキムは後にニューヨークの Pierpont Morgan Library も設計し、こちらの装飾は画家 Henry Siddens Mowbray（1858-1928）が担当、1906 年に完成している。

[39] Douglas, Howard Grey. *Library of Congress, Washington, D. C.; its principal architectural and decorative features in the colors of the original.* ［S.l.］, 1901. と *The Library of Congress mural paintings in the colors of the original*. New York, B. S. Reynolds, 1902. で、いずれも HathiTrust で閲覧できる。

[40] Possevino, Antonio. *Bibliotheca selecta, qua agitur de ratione studiorum* ... Romae, Typographia Apostolica Vaticana, 1593. 本書は Google Books で閲覧できる。

[41] 1603 年の第 2 版では第 1 巻第 1 書第 45-53 章(p.41-49)。

[42] デカルトはイエズス会の運営するラ・フレーシュ学院を卒業して、ポワティエ大学に進んだ。

[43] Garner, Jean. *Systema Bibliothecae Collegii Parisiensis Societatis Jesu*. Parisiis, Sebastianus Mabre-Cramoisy, 1678.

[44] 前掲 18), p.406-409.

[45] Rocca, Angelo. *Bibliotheca Angelica litteratorum, litterarumque amatorum commoditadi dicata Romae in aedibus Augustinianis*. Romae, Stephanum Paulinum,

1608. この本は Google Books で閲覧できる。

[46] 1604 年より館長であったアウグスト公 Herzog August der Jüngere（1579-1666）は 1625 年より自身の手で蔵書目録を作成し、大きなフォリオ・サイズの第 1 冊が 1631 年に完成、1642 年には全 4 冊 3692 頁が完成したが、刊行はされていない。Heinemann, Otto von. *Die Herzogliche Bibliothek zu Wolfenbüttel, 1550-1893*. Wolfenbüttel, Z. Zwissler, 1893, p.74-76. を参照。

[47] ヘルマン・コンリングは統計学の創始者として知られる学者であるが、医学から法学、政治学まで幅広く研究した。国状学と呼ばれる講義では日本の国状についても語っている。ブランシュヴァイク家に若いころ寄宿した縁でアウグスト公図書館に関心を寄せていた。自身が蔵書家で 1694 年には *Catalogus Bibliothecae Conringianae* という蔵書目録が刊行されている。

[48] 外交官ボイネブルク男爵は愛書家で 1 万タイトルを越える蔵書を持っていた。また、哲学者ライプニッツの後援者でもあり、ライプニッツは 1667 年にボイネブルク男爵の蔵書を整理している。これが 1690 年にライプニッツがアウグスト公図書館長となる縁となった。

[49] Conring, Hermann. *De Bibliotheca Augusta quae est in arce Wolfenbuttelensi, ad illustr. et generosum. Joannem Christianum L. Bar a Boineburg epistola*. Helmstadii, H. Mulleri, 1661, p.173. この本は Google Books で読める。また、以下のドイツ語訳がある。Conring, Hermann. *Die Bibliothek Augusta zu Wolfenbüttel: Zugleich über Bibliotheken überhaupt; Brief an Johann Christian Freiherrn von Boineburg*. Übers. und hrsg. von Peter Mortzfeld. Göttingen, Wallstein Verlag, 2005.

[50] Ledos, E. G. *Histoire des catalogues des livres imprimés de la Bibliothèque nationale*. Paris, Éditions des bibliothèques nationales, 1936, p.16-17.

[51] アントン・マリアベキはトスカナ大公コシモ 3 世の司書を務め、自身が愛書家であった。遺言によりその 3 万冊の蔵書はフィレンツェ市に遺贈され、トスカナ大公は一般に公開する図書館の開設を決めた。

[52] アントニオ・コッキは解剖学に名を残す医学者。ギリシア語・ラテン語の古代哲学書にも精通した博学者であった。

[53] Goggioli, Maria Mannelli. *La Biblioteca Magliabechiana; libri, uomini, idee per la prima biblioteca pubblica a Firenze*. Firenze, L. S. Olschki, 2000, p.75-76.

[54] Cocchi, Antonio. *Dei discorsi Toscani del dottore Antonio Cocchi* ... pt. 1. Firenze, Andrea Bonducci, 1761. p.IL-L. 本書は Google Books で閲覧できる。

[55] 各冊の収録する巻号は以下の通り。第 1 冊は T.1, pt.1,lib.1-5,pt.2,lib.1-5 を、第 2 冊は T.1, pt.2,lib.6-8 を、第 3 冊は T.1, pt.3,lib.1-4 を、第 4 冊は T.2, pt.1,lib.1-6,pt.2,lib.1-4,pt.3,lib.1-8 を、第 5 冊は T.3, pt.1,lib.1-2,pt.2,lib.1-2,pt.3,lib.1-5 を、第 6 冊は T.3, pt.3,lib.6-7 を、第 7 冊は T.3, pt.3,lib.8-9 を収録。

[56] G. マルタンは 160 点以上の目録を刊行しているが、以下の目録に分類体系の細かい説明がある。Martin, Gabriel. *Bibliotheca Bultelliana, seu Catalogus librorum bibliothecae V. Cl. D. Caroli Bulteau*... Parisiis, P. Giffart et G. Martin, 1711, p.i-xxxvi(Systema bibliographicum Bibliothecae Bultellianae). この本は Google Books で読める。

[57] Diderot, D. & D' Alembert, J. L. *Encyclopédie*, t.2. Paris, 1752, p.759-763. Gallica で閲覧できる。

[58] ロックの『人間悟性論』は人間の知識のあり方をもとに、学問を自然学、倫理学、記号論の 3 つに分けた。

[59] Chambers, Ephraim. *Cyclopaedia. or An universal dictionary of arts and sciences* ... v.1 London, 1728, p.i-xxx. この版は ECCO で閲覧でき、後の版は Google Books で閲覧できる。

[60] ベーコンの『学問の進歩』は学問を人間の知力の 3 種類である記憶､想像力､理性に対応する歴史､詩、哲学に分けた。

[61] Diderot, D. & D' Alembert, J. L. *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*. t.1. Paris, 1751, p.i-lii: Discours préliminaire des éditeurs 末尾の付図 . Gallica で閲覧できる。

[62] Yeo, Richard. *Encyclopedic visions; scientific dictionaries and enlightenment culture*. Cambridge, Cambridge University Press, 2001, p.15-16.

[63] le citoyen Ameilhon "Projet sur quelques changemens qu' on pourroit faire à nos catalogues de bibliothèques ... ," *Mémoires de l' Institut national des sciences et arts. Littératures et beaux-arts*, Tom.2, 1799, p.477-492. この雑誌は Gallica で読める。アメイロンは図書館司書も務め、1797 年にはアルセナル図書館長となった。

[64] Camus, A.-C. "Observations sur la distribution et le classement des livres d' une bibliothèques," *Mémoires de l' Institut national des sciences et arts. Littératures et beaux-arts*, Tom.1, 1798, p.643-666,675-676. 実際の発表とは逆に、こちらのほうが雑誌には先に掲載された。Gallica で読める。カミュは国民公会議員などを務めたが、パリの公文書館での業務も行なった人物である。

[65] ミヒャエル・デニスはウィーンのテレジア学院図書館長も務めた書誌学者。*Einleitung in die Bücherkunde*. Tl.1. *Bibliographie*. Wien, J. Thomas Edl. v. Trattnern, 1777, p.257-273. が分類を扱った部分で、末尾に Classis. Scientia. Ordines という一覧表が付けられている。この本は Google Books で読める。彼は大項目を神学、法学、哲学、医学、数学(自然科学全般のこと)、歴史、文献学の 7 つとしたが、神学と法学を結ぶ公会議、法学と哲学を結ぶ自然法、哲学と医学を結ぶ博物誌、医学と数学を結ぶ解剖学、数学と歴史を結ぶ年代学、歴史と文献学を結ぶ英雄譚、文献学と神学を結ぶ神話学により体系は円環をなしているという。

[66] この法令と「公教育に関する報告」(1795 年 10 月 15 日)は岩波文庫の『フランス革命期の公教育論』コンドルセ他著 , 阪上孝編訳 , 岩波書店 , 2002, p.385-415. に掲載されている。アメイロンやカミュが分類について論じた国立学術院はドーヌー法により作られた機関である。

[67] *Catalogue des livres de la bibliothèque de feu M. Daunou*. Paris, J. Techner, 1841. 2,487 ロットの蔵書が彼の分類体系に従って排列されている。本文の前にドーヌーの簡単な伝記が付いており、Google Books で閲覧できる。

[68] Comte, Auguste. *Cours de philosophie positive*. t.1. Paris, Rouen frères, 1830. この本は Gallica で閲覧できる。

[69] Brunet, J. C. *Manuel de libraire et de l' amateur de livres*. 5. éd. Paris, Firmin Didot, 1860-65. 6 v. この本は Gallica で閲覧できる。この分類体系を第 1 細分まで記すと、神学(聖典、典礼書、公会議、教父、神学者、異端、ユダヤ教、オリエントの宗教、付録)、法学(自然法、政治法、民法・刑法、教会法)、学芸(哲学［政治・経済はここに含まれる］、物理・化学、生物・地学、医学、数学、応用科学、芸術、工芸、体育、娯楽)、文芸(言語学、修辞学、詩、散文フィクション、文献学、対話篇、書簡文、多作家・全集)、歴史(地理・紀行、普遍史、宗教史、古代史、近代史、その他［考古学・伝記・書誌・文献史などが含まれる］)。

[70] 19 世紀のイタリア図書館学については Biagetti, Maria Teresa. *Biblioteconomia italiana dell' ottocento; catalografia e teoria bibliografica nella trattatistica italiana*. Roma, Bulzoni, 1996. を参照のこと。

[71] Rossetti, Domenico. *Dello scibile e del suo insegnamento; quattro discorsi e due sogni*. Venezia, Alvisopoli, 1832, p.3-118. この本は Google Books で読める。

[72] Ilari, Lorenzo. *Indice per materie della Biblioteca comunale di Siena*. Siena,

Tipografia all' insegna dell' Ancora, 1844, p.III-XXII. この本は Google Books で読める。

[73] Cardile, Giuseppe. *Studj fondamentali della scienza bibliografia*. Palermo, Carini, 1850,

[74] Palermo, Francesco. *Classazione dei libri a stampa dell' I. e R. Palatina in corrispondenza di un nuovo ordinamento dello scibile umano*. Firenze, Biblioteca Palatina, 1854. この本は Google Books で読める。

[75] DDC の初版は Dewey, Melvil. *A classification and subject index for cataloguing and arranging the books and pamphlets of a library*. Amherst, 1876. で 42 頁の小冊子、うち分類表は 12 頁であった。カッター展開分類表の初版は Cutter, Charles A. *Expansive classification*. Pt.1. *The first six classifications*. Boston, 1891-93. で、Pt.2 *The seventh classification* はカッターの死去により未完の形で 1904 年に刊行された。1900 年に刊行された文部省編纂『図書館管理法』（著者は帝国図書館長田中稲城）ではこれらの分類表を紹介している。

[76] Brown, James D. *Manual of library classification and shelf arrangement*. London, Library Supply Company, 1898. この本は Internet Archive で閲覧できる。

[77] Richardson, Ernest Cushing. *Classification; theoretical and practical*. New York, Charles Scribner' s Sons, 1901. この本は Internet Archive で閲覧できる。

[78] この雑誌は現在では Oxford Journals Online という有料データベースで全文閲覧できる。また、この雑誌の 1929 年までの歴史について以下の論文がある。Pollard, A. W. "The Library; a history of forty volumes," *The Library*, Ser.4, Vol.10, No. 4, Mar. 1930, p.398-417.

[79] 英国図書館協会は 1878 年に設立され、1880 年に機関誌 *Monthly notes* が創刊された。この雑誌は 1884 年に *Library chronicle* と改題されたが、1888 年には廃刊となっている。

[80] A. W. ポラードはシェイクスピア作品の書誌学研究で有名。

[81] Serrai, Alfredo. *Le classificazioni; idee e materiali per una teoria e per una storia*. Firenze, L. S. Olschki, 1977.

[82] Blum, Rudolf. *Bibliographia; an inquiry into its definition and designations*. Tr. by Mathilde V. Rovelstad. Chicago, American Library Association, 1980. この英訳はミスプリントが多いので注意が必要。その点、伊訳 *Bibliografia; indagine diacronica sul termine e sul concetto*. Tr. di Maria Letizia Fabbrini. Milano, Sylvestre Bonnard, 2007. はミスプリントがあまりない。原本は *Bibliographia; eine wort- und begriffsgeschichtliche Untersuchung*. Frankfurt am Main, Buchhändler-Vereinigung, 1969.